『臨床発達心理実践研究』執筆の手引き（2023 年 6 月版）

＊この手引きでは，最初に「実践研究」とは何かを説明します。次に，実践研究に限らず，すべての論文が満たすべき形式について説明します。投稿に際して，論文が守るべき体裁については「『臨床発達心理実践研究』投稿論文原稿作成要領」をご覧下さい。

【1】実践研究の目的：何のための「研究」だろうか？

いったい，なぜ「研究」が必要なのでしょうか？ 「実践報告」とは何が違うのでしょうか？ 以下の 3 点から考えてみます。

1．実践方法の共有

ある実践がうまくいったとき，どのような対象者にどのような方法によって支援したかが明確になっていると，類似の対象者にその方法を適用することが可能になります（再現可能性）。また逆に，うまくいかなかった実践も同様に参考になります。

この様に，実践の方法論を多くの臨床発達心理士が共有することによって，より効果的で効率的な支援が可能になってくると考えられます。そのためにも他の臨床発達心理士が，類似の事例に適用しようとしたとき再現可能となるよう，特に方法や結果において正確で的確な記述が必要になります。

2．実践の相対化・自己評価

実践はとかく独りよがりになりがちです。それを避けるために，自分の実践を再現可能な形で第 3 者に開示し，相対化し，評価を受けることの意義も大きいと思われます。投稿の過程で審査者によるコメントが入り，それに応えて修正する，といったことを何回か行いながら，「こういった説明では伝わりにくいのか」「この結果はこういった解釈も可能か」「この対象者に，別のアプローチもあるかも知れない」など，新たな観点を見いだすことができ，自己の実践の相対化，自己洞察が行われます。

3．人間探求，発達の新たな理解に向けて

本資格では，臨床発達心理学を「人の生涯にわたる生物・心理・社会的側面からなる生活文脈の場の中で起こり得る，様々な兆候・問題・障害を包んだ（インクルージョンの視点を持った）時間的・発生的な過程から，人間の心的機構の解明を行い，また，そのことを通して，具体的な発達支援の方法論の検討を行う人間探究の領域」としています。臨床発達心理学が単なる実践技術の研究はもとより，「兆候・問題・障害」を通して，より深い「人間探究の領域」になりうる可能性を強調しています。実践研究によって，新たな人間理解，発達の理解を目指したいと考えています。

【2】投稿論文の形式

論文は一般に，「要旨」，「問題」，「方法」，「結果」，「考察」，「文献」，「謝辞（必要な場合のみ）」の各項目に分けられます。

注意 1　論文の執筆に当たっては，過去の『臨床発達心理実践研究』を手元に置き，掲載論文を読んでください。形式が整っていることが内容の理解を助けるものであることがわかります。

注意２　図表の作成方法，文献の記載方法の詳細は「発達心理学研究編集委員会　論文原稿作成のための手引き」（以下「発心原稿作成の手引き」とします）に準拠します。「発心原稿作成の手引き」の最新版は以下からダウンロードすることができます（なお，2023 年 6 月現在の最新版は 2022 年 8 月改訂版です）。必ず手元において下さい。

ダウンロード先：https://www.jsdp.jp/contents/~cmhenshu/paper/files/tebiki202208.pdf

１．要旨

読者が要旨を読むことで，手短に論文の内容を把握できるためのものです。目的・対象および方法・結果・考察を端的にまとめます。最初はメモ書きでかまいません。最終的に文章に仕上げます。

２．問題（「はじめに」，「問題と目的」とすることもあります。）

読者に，この実践研究の意義と目的を理解してもらうために書く部分です。著者がこのテーマに注目する理由，この実践研究に関連した分野で明らかにされている知見，この論文で検討すべき事柄，および目的などについて記載します。

また各段落では一つのテーマについて記述し，段落の最初か最後にその段落の結論を書きます。このようにそれぞれの段落をまとめ，それを順番に並べて行くと，論旨が読者に伝わりやすくなります。

実際の執筆に際しては，「問題」は最初ではなくて，最後に書くことが多いようです。考察とバランスを取りながら，論文を完成させるためです。

３．方法

全般的な留意事項　方法では，対象児，指導期間，指導場所，教材（器具），指導手続き，結果の整理方法などを客観的，具体的に記載します。対象児の項目では，アセスメント，保護者および本人からの主訴・依頼事項，本人の得意な点などの行動および心理特性などを含めます。

この部分は，指導計画および指導実施時に確定しているので，最も書きやすい箇所であると考えられます。

実践研究で留意すべきこと　以下の点に考慮して方法を記述すると良いでしょう（以下は主に，臨床発達心理士申請ガイドを参考にしています）。

(1) 発達支援の対象者の概要（年齢，性別，生育歴，家族構成，支援・教育歴等）
(2) 発達支援等を実施した機関・施設・場所
(3) 実施期間
(4) アセスメント（発達検査や行動観察，また環境・生態学的調査など）

(5) 総合所見

総合所見は，アセスメントの結果に基づいて，以下のことをまとめます。

a．対象者の発達（生理・医学的側面，心理・学習・教育的側面など）に関する個体能力的観点からの実態や問題点

b．対象者に関わる人々・環境（環境・社会・文化的側面，家族や教師・仲間など対人的環境，物理的環境）に関する実態や問題点

(6) 総合所見に基づく支援仮説，長期・短期支援目標，および支援計画

支援仮説・支援目標・支援計画は，次の２つの観点から記述します。

a．対象者への支援

b．対象者に関わる人々（家族や教師・仲間など）や環境への支援

(7) 倫理的配慮事項の明記

実践研究の対象者，保護者などの代諾者，所属機関長に対して研究の目的や内容，公表方法などについて適切に説明を行い，同意を得たことを明記して下さい。ここで大切なことは，①同意の意思確認は口頭では無く必ず“書面”で行なうこと，②専門用語の過剰な使用は控え平明な説明を心がけること，③相手の諾否の自由意思を尊重し，あらかじめ研究協力を“断ってもよい”ことを伝えて依頼することです。また，その諾否に関わらず，対象者に不利益が生じないように，最大限の配慮をしましょう。

また，研究者の所属する研究機関や専門施設に「研究倫理委員会」が設置され，当該研究がその承認を得ている場合はその旨を記載してください（承認日時及び番号等も記載）。倫理的諸点を遵守は対象者とその家族の人権だけでなく，私達，実践者･研究者を守ることにもなるのです。

※実践研究の倫理的遵守事項については，別紙の本巻末「臨床発達心理実践研究 倫理チェックリスト（投稿・寄稿者用）」を必ずご確認ください。

４．結果

全般的な留意事項　この実践研究で得られた結果を読者に簡潔に分かりやすく示します。結果は本文で記述し，本文を補足するために，図や表を加えます。図表は結果を明快に示しますが，多くの紙面を使うので，数を少なくすることに努めます。図表の作成方法の詳細は「発心原稿作成の手引き」を参照して下さい。

論文の執筆にあたっては，最初に方法と結果をまとめることから始めると良いでしょう。結果が確定すると，それに応じて論文のその他の部分をまとめることができます。

実践研究で留意すべきこと　以下の点に考慮して結果を記述すると良いでしょう。支援などの経過をできるだけ次の２つの観点に分けて記述します。

a．対象者の時系列的変化

b．対象者に関わる人々（家族や教師・仲間など）や環境の時系列的変化

また，変化の様子がわかるよう，段階や時期区分を行って記述します。

結果の記述は，検査得点や頻度に関するデータのような量的記述と，エピソード記述のような質的記述を組み合わせることが望ましいと考えられます。また，丁寧な分析が行われるならば，質的記述だけでも結果の記述になり得ます。

５．考察

全般的な留意事項　まず，結果から導き出すことができる結論を述べ，次にその根拠を述べます。このとき，「問題」で引用した先行研究の知見を参照し，結論を補強すると説得力が増します。考察を書くにあたって，この研究から主張できる知見・事実の範囲を常に意識し，過剰な表現やテーマから外れた展開を避けるように心がけます。考察の最後に，この研究の成果と課題を述べます。

実践研究で留意すべきこと　以下の点に考慮して考察を記述すると良いでしょう。

支援の結果には，支援目標が達成された面と，達成されなかった面があるでしょう。そこから対象者の発達のメカニズムを検討し，最初の評価よりも一層深い，また新たな観点による対象者理解・評価を行い，今後の支援の課題と方法について考えます。

(1) 時系列的変化のメカニズムの検討

a．対象者の時系列的変化のメカニズム：

対象者自身の生物学的変化・成長，支援の効果，およびそれらの相互作用などがどのように関連しあったのか。また，どの時期のどのような操作が，どのメカニズムに効果をもたらしたかについて検討します。

b．関わる人々・環境の時系列的変化のメカニズム：

対象者に関わる人々がどのように変化をしたのか，対象者に関わる人々や環境への支援の効果，およびその相互作用について検討します。

(2) 目標設定・支援方法の妥当性，支援の効果の検討

(1) と関連させ，これらが妥当であったかを，支援の効果・限界について自己検証します。

(3) 新たな理解・評価と今後の課題

支援をすることによって，対象者について更に深い理解，評価がなされたはずです。例えば，「支援によって・・・のような面の伸び，変化は見られたが，・・・の様な面の困難さが 認められた。」などです。これらから今後の課題・支援方法が導き出されると思われます。

そのことを通して人間の発達メカニズムや，類似の事例について，先行研究と対照しながら，支援の一般化についても考察することが望まれます。この点がなされている場合には「事例研究」としての意義が高いといえます。

６．文献

本文中で引用した文献名を論文の最後にまとめてすべて記載します。見出しは「文献」とします。文献は，日本語文献と外国語文献に分けず，著者名のアルファベット順に並べます。必ず「発心原稿作成の手引き」を手元におき，参照しながら作成して下さい。

７．謝辞

研究を進める上で協力・支援をしてくれた人，助言をしてくれた人などの名前を挙げて感謝の意を表します。また，子ども達や保護者など研究に協力していただいた方（通常匿名）への感謝を述べることもあります。謝辞は，筆者が必要と判断する場合にのみ含めます。